



TITLE:

第59回岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

第59回岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1971, 40(1): 114-117

ISSUE DATE:

1971-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/207917>

RIGHT:

尚本症は稀な疾患故に誤って某医で切除術を受け髄液瘻となった症例である。

症例：生後5日目♂，生下時体重3250g 家族歴，妊娠歴ともに特計すべきものなし，現病歴，生来仙尾骨部に小指頭大の腫瘤あり生後2日目に剔出術を受けたところ術後2日目より髄液の流出を来し当科へ入院した。現症及び局所所見：体格中等で軽度の新生児黄疸あり，仙尾骨部に肛門より1.5cm 尾骨よりの正中線上に瘻孔あり，瘻孔より髄液の細菌検査でG(+)のCoccusとBacillusを証明，生後10日目に気管内挿管全麻下に根治術施行，Sinusは第3仙椎の高さで脊髄管の中へ入っており直径約2mm 組織標本でDermoid等の腫瘍所見なく，Sinusの内腔は壊死反応のためか皮膚上皮組織は判然とせず。術後10日目より，髄液が少なく膿様となり，pentrex および keflodine を髄液内へ注入し，術後49日目全治退院した。合せて文献的考察も行った。

11. 外傷性腓骨動脈瘻の1治験例

岐大1外科

小川隆司 広瀬光夫 村瀬恭一

最近の血管外科の発展に伴ない胸部，腹部の大動脈

瘤の報告は増加しつつあるが，四肢動脈瘤についてはあまり記載されていない。我々は最近，外傷性腓骨動脈瘤を経験したので報告した。症例は19才，男子で昭和45年7月9日道路に置かれていたウインドーガラスにつまづき，右膝直下を損傷し某医に入院し以後20日間位の内に3回大量出血を生じ我々の施設を訪れた，大腿動脈造影にて Peroneal artery に母指頭大の動脈瘤を確認し，腰麻下に下腿外側より A.poplitea に達し peroneal artery を結紮した。術後経過良好にて全治退院した。

12. Triangular Volar Flap による指断端形成術について。

岐阜市民病院 整形外科

○笠原吉孝 渡辺 良 岡 正典

中根康雄 宮田慶男

我々は最近，右母指及び示指の末節部切断を来した18才女子の症例に対して Atasoyらの報告した Triangular Volar Flap による指断端形成術を施行し良好なる成績をおさめたので報告した。

第59回岐阜外科集談会

日時：昭和45年12月22日午後5時30分

場所：岐阜大学医学部丹羽講堂

1. 頭蓋内 Cholesteatoma の3例

岐大第2外科 樫 木 良 友

(昭和45年12月22日)

頭蓋内に発生した所謂 Cholesteatoma の3例について若干の考察を加え報告した。

症例1. 65才の女子。4年来の頭痛，浮動感，右眼瞼下垂，右視力障害にて来院。脳血管写にてトルコ鞍部腫瘍と診断。視束交叉直下に小クル実大の灰白色 Cyste を全摘。組織学的には Cholesteatoma (epidermoid) であった。

症例2. 61才女子。1ヶ月前よりの右耳漏，難聴，頭痛にて来院。頭部単純レ線像で右後頭部骨破壊を認め，脳血管写にて右後頭葉腫瘍と診断。右耳介後方よ

り右S字状静脈洞に到る灰白色の鶏卵大硬膜下 Cyste を摘出。組織学的に耳性 Cholesteatoma であった。

症例3. 47才男子。6年来の左前額部無痛性腫瘤にて来院。頭部単純レ線像にて左前額部骨破壊像，脳血管写にて左前頭葉腫瘍と診断。左前頭部硬膜下の暗赤色の Cyste を全摘。組織学的には Cholesteatoma (epidermoid) と診断された。

2. われわれの行なった水頭症に対する shunt operation について

岐大第2外科

安藤 隆 田中干凱 高田光昭

国枝篤郎 坂田一記

水頭症52例に対して過去7年4ヵ月間に施行した脳室心房連絡術63回，脳室腹腔連絡術21回について，そ

の合併症、不調の原因、脳室側管閉塞および腹腔側管不調の対策を検討した。まず連絡術の不調原因で最も多いのが脳室側管の閉塞であるが、その対策として最近使用している flat bottom Mishler double lumen reservoir と Portnoy 型脳室側管の併用は有用である。

脳室腹腔連絡術は症例経験も少なく、不調特に腹腔側管の不調が多かったが重篤な合併症もなく手術侵襲も少ない点ならびに術後も Air study を施行し得るなど適用範囲も広く今後も症例をふやし検討していきたい。

3. 甲状腺腫の検討(第2報)

胸内甲状腺腫2例について

岐阜日赤 松浦昭吉 原 節雄
井戸豊彦

胸内甲状腺腫の定義は、種々あるが、私達は Rives の分類にて、ⅡB2bの範中に入る2症例を報告した。

症例1は、47才、女性で、8年間右頸部腫瘤を放置した結果の腺腫であった。

症例2は、61才、女性で、左頸部腫瘤で、甲状腺は Fibrosis に満ちた慢性甲状腺炎を伴う Thymic cyste であった。

いずれも頸部単純レントゲン写真にて、食道、気管の変形を捉し、単純写真の有用性も併せて強調した。

4. 気管支内異物の1例

岐阜第1外科 小川隆司 馬場英逸

8才男児で、昭和45年10月4日夜半に突然少量の咯血を生じて来院当院耳鼻科にて再三気管支鏡下に摘出が試みられたが摘出しえず、10月9日開胸、右下葉S₉はビマン性に暗赤色、無気肺様でかなり深部に異物を触知したので、右下葉切除を施行、B₉末梢部にシャープペンシル先端の金具が嵌入し、異物末梢の気管支腔より少量の膿性粘液性の喀痰が流出した。術後経過良好で第14病日に退院した。

5. 縦隔奇形腫(皮様嚢腫)の1例について

国療岐阜病院 外科

加藤康夫、小林君美、井上律子
松本守海、浅野 靖

我々は、最近嚢腫性の奇形腫の1例に腫瘤摘出術を行ない治癒せしめたので報告する。本例は、数ヵ月前

より夜間に咳嗽喀痰がみとめられ、治り難く、某院を受診し、縦隔腫瘍と診断されている。

現症では特記すべきものなく、貧血もみとめられない。胸部X線写真で、縦隔を底辺とし、右胸腔内に突出した三角形の輪部の円滑な腫瘤様陰影が前縦隔にみとめられる。

全身麻酔下、右開胸で腫瘤摘出術を行なう。腫瘤と肺との癒着はなく、7×5.5×3.5cmの腫瘤を完全に摘出する。

摘出標本の内容物は豆腐から様物質で、その中に白色毛髪をみとめる。内部に突出した部分があり、組織像より atrophy した胸腺組織であることが判る。このことは奇形腫の胸腺内発生説を支持していると考える。

奇形腫は低率ではあるが悪性のものもあり、また炎症により周囲臓器への穿孔もあるので、無症状の間に摘出術を行なうのが賢明である。

6. 偽型総動脈管の1例

岐阜第1外科

下野達宏、小川隆司、広瀬光男

9才女児、乳幼時期よりチアノーゼあり、上気道感染をくり返していたが、就学後チアノーゼはやゝ軽快し、現在まで通学可能であった。現症：体重17kg 発育不良で、口唇・指趾に軽度のチアノーゼおよび太鼓撓指を認める。全弁口部に連続性雑音あり、左背部でもよく聴取しうる。胸部レ線では心陰影軽度拡大、左第1弓を認めず、左第2、第4弓の突出あり、肺血管陰影はほぼ正常である。右心カテーテル検査にて肺動脈への挿入不能で大動脈には容易に挿入しえた。右心造影では早期に太い大動脈が造影され、やゝおくれて肺動脈幹があわく造影される。逆行性大動脈造影では大動脈起始部と肺動脈間に小さい短絡があり、また両肺とも気管支動脈より血流を受けている。偽型総動脈管、右側大動弓症と診断し、現在経過観察中である。

7. 肺転移と照射

県立岐阜病院放射線科 奥 孝 行

悪性腫瘍の肺転移は一般に血行転移であり、放射線治療の対象となるものは稀である。しかし時に肺転移に対して照射が有効な場合がある。過去の症例の中、このようなものを集めた。乳癌、甲状腺癌、悪性リンパ腫、耳下腺癌の各々1例である。悪法リンパ腫を除いて、他の3例は原発巣の手術から肺転移出現までの

期間が長いこと、転移巣の数が少ないことが特徴であった。悪性リンパ腫は本来、放射線感受性が高く、ために相当多数の転移巣でも照射の対象となる。

一般に放射線感受性の高い腫瘍では肺転移に対して積極的に照射を試みるべきであり、低感受性のものでも転移巣の数が少ない場合には、試験的に行ってみるべきであろう。

8. 胃切除後食餌性イレウスの1例

岐阜市民病院（外科）

松岡俊彦，安江幸洋，三尾六蔵

三沢恵一，島田 脩

岐阜第2外科

堀部 廉

消化管内異物によるイレウスに関しては多くの報告があるが、食餌によるものは比較的少なく、特に胃切除後の患者ではまれなものである。最近我々は、48才の男性で胃切除術（ビルロートⅡ法）後5年目に、夕食にスキヤキを食べその翌日より仙痛発作を来したため開腹した所、回盲部より約15cmの口側に鶏卵大、弾性軟の腸詰様の腫瘤がありこれによりイレウスを来していた。腸切開の結果のシラタキがソーセージ様となり腸内腔を閉塞したものであった。

以上の如く症例を経験したので報告するとともに若干の文献的考察を加え報告した。

9. 多発胃癌と思われた胃内転移胃癌の1例

県立岐阜病院 外科 本多雅昭，須原邦和

臨床病理 高橋親彦

岐阜第2外科 妹尾武彦

我々は早期胃癌の診断のもとに手術を行った所、胃内他部にも腫瘍が認められ多発胃癌を疑ったが、病理組織学的検索の結果胃内転移胃癌と考えるに至った1例を経験したので報告した。

症例は56才男子で、約2ヶ月前より心窩部の膨満感及び不快感と食後の悪心があり、胃内視鏡検査にて胃体部上部後壁にⅡa+Ⅱcの病変が認められ同部の胃生検にて癌腫と診断された。胃レ線検査では内視鏡所見に一致した胃体部上部後壁の皺襞の不整の他、前庭部大彎辺縁の不整も認められた。手術を施行した所胃レ線検査にて異常所見がみられた両部位に腫瘤を認め胃全摘除術を行った。病理組織学的には胃体部上部後壁に原発し前庭部大彎側後壁へ転移した胃癌と考えられた。

10. 脾腺腫の1例について

岐阜第2外科 大橋 広文

29才，女性，昭和45年8月初旬より左季肋部から背部にかけて食後鈍痛を来とし、左季肋部に鶏卵大の硬い腫瘤を触知した。全身所見、及び一般臨床検査所見には特記すべきものなし、腫瘤は心窩部やや左側にあり、鶏卵大を有し、硬く、境界はあまりはっきりしない。表面は軽度凹凸を認める。腹腔動脈写にて、心窩部に比較的血管増生に乏しい腫瘤像がみられた。開腹してみるに、肝、胃小彎にかこまれて、超乎拳大の球形の腫瘤があらわれた。腫瘤は脾体部から尾部にかけて占拠する脾腫瘍であり、Vgastroepiploicaが正常の5倍程に怒張していた。腫瘤の全摘出と脾臓摘出を行った。脾腫瘍は組織学的にcystadenomaであり部分的に高度の細胞核異形を伴っていた。

最近脾腺腫の1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。

11. 成人の小腸破裂の1症例

岐阜第1外科

河合寿一，下野達宏，村瀬恭一

最近、我々はまれな成人の小腸破裂の1症例を経験した。患者は41才男子で主訴は右下腹部痛である。家族歴特記すべきものなし。3～4年前より飛蚊症をきたし眼科にて網膜剝離の診断にて治療を受けていたが第9病日に突然39℃の発熱と右下腹部痛をきたし当科を受診、急性腹膜炎の診断のもとに開腹した。虫垂は軽度の炎症像のみで回腸末端より口側50cmの前壁に長径0.5mmの穿孔を認めた。病理組織学的には好酸球を主とする細胞浸潤が著明であった。術後第14病日より39.7℃の発熱、口内炎、右陰嚢の硬結、潰瘍をきたし皮膚科にて治療の結果軽快したが、この回腸穿孔がパーチェット症候群に原因すること考えられるので経過観察中である。

12. 原発性尿管癌の1例

岐阜第1外科 常田 昌弘

症例：73才。初診：昭45.9.7。主訴：無症候性血尿。既往歴：肺結核症62才，膀胱腫瘍68才，以後経過観察し、昭45.1.7までIVP，膀胱鏡所見上著変なし。家族歴：特記すべきものなし。現病歴：昭45.9.6無症候性血尿を来し来院、9月27日膀胱鏡所見上、右尿管

口よりの出血を認む。入院時 RP 上, 右尿管下部に陰影欠損を認め, 尿管カテーテル挿入時抵抗あり。10月7日尿管腫瘍として, 尿管摘除術兼膀胱部分切除術を試みたが, 術中不整脈著明なため, 2 週後, 二次的に腎

摘除術施行。組織学的に乳頭状移行上皮癌 (Grade I) であった。本邦報告例に自験例を加えた 280例につき若干の統計的考察を加えた。

第 60 回 岐 阜 外 科 集 談 会

日時：昭和46年2月25日午後5時30分

場所：今回は都合により岐阜会館5階

1. 新生児 Bochdaleck 氏孔ヘルニアの

1 治験例

岐阜第2外科

田 辺 祐 介 榎 本 良 友

最近我々は新生児 Bochdaleck 氏孔ヘルニアの1例を経験したので弱干の考察を加え報告した。

症例：生後4日目の男児

現病歴：満期安産にて生下時体重は 2,500g であった。生後2日目より呼吸困難, チアトーゼをきたし, 生後4日目に胸部X線にて横隔膜ヘルニアと診断され緊急手術を行った。

手術所見：上腹部横切開にて開腹した。左横隔膜中央部に 3×4cm の裂孔を認め, 右大腸, 胃, 脾, 小腸が腹膜に包まれ胸腔内に脱出しており, 腸回転異常を伴った真性の Bochdaleck 氏孔ヘルニアであることが判明した。これらの臓器を還納し, 腸回転異常に対して Ladd の手術を行った。腹壁は一次的に縫合し得た。

術後経過：術後3日目より排便があり, 又術後4日目まで左胸腔内の穿刺による脱気が続けたが左気胸の改善なく, これを中止し経過を観察していると, 左肺は徐々に膨張し, 術後22日目には左気胸は消失し, 同日全治退院した。

2. 腸捻転をともなった腸管回転異常の1例

岐阜市民病院外科 三 尾 六 蔵

岐阜第2外科 堀 部 廉

生後8日の男子で, 生後6日目より胆汁性嘔吐を来したし腹部単純レ線撮影で典型的な double bubble sign と注腸透視による結腸の位置異常を示した腸捻転をともなった腸管回転異常の1例を報告した。

開腹時の所見より, 本症例はGrohの云うmalrotation II型に属するものと考えられた。又腸回転異常

に腸捻転が生後間もなく合併する事由につき2~3の考察を加えた。

3. Polyp に先導された新生児空腸重積症の1例

岐阜第2外科 細 野 和 久

症例は5日目の女児, 主訴は嘔吐で, 妊娠分娩経過には異常なかった。生下時体重 3,250gr. 生後29時間目に母乳を与えたところ嘔吐し其の後も授乳各に嘔吐した。meconium は生後24時間の間に4回あった。3日目にはタール便の排泄あり, 脱水のため間代性痙攣来し来院す。胃十二指腸透視で小腸上部にガス像著明にて小腸上部の閉塞を疑わしめ開腹術を行った。横切開して見ると“トライツ”より約40cm anal に約5.0cm の Invagination を認めた。ハッチンソンの手技にて嵌人腸管を圧出すると, 先端に大豆大のtumorを触れるためこれより oral に3.0cmの縦切開を加えtumorのみ摘出する。このtumorは, 胆嚢が胆管の迷入を思わせる組織奇型による polyp であった。患児は術後13日目に縫合部穿孔による汎性の性腹膜炎と腸閉塞症にて死亡した。本症は非常に稀で本邦では未だ10例の報告をみるのみである。

4. 小児大腸ポリポーシスの1治験例

岐阜大1外科

小川隆司, 下野達宏, 後藤暗彦

小児大腸ポリポーシスは比較的稀なものであり, 最近我々は6才男子で血清蛋白 4.9g/dl 赤血球数 277×10^4 で, 輸血, プラスマネートの投与にもかかわらず, 貧血, 血清蛋白の改善は見られず, 蛋白漏出を伴った大腸ポリポーシスと診断し, 広範囲結腸切除, 回腸直腸吻合術を施行し, 術後赤血球数 400万以上血清蛋白 7.5g/dl 前後と著明な改善をみた。摘出標本は盲